

『地球時代と平和への思想』を書き終えて

堀 尾 輝 久

今年1月私は卒寿を迎えました。これからは、一日一日を感謝し、のんびりと過ごしたい。とはいえ、平和と子どもの幸せを願って生きてきたものにとって、内外危険なこのご時世、“老人よ身体を鍛えておけ、こんな世の中オメオメとは死ねないぞ”という友人の声もあり、一つの区切りとして、遺書のつもりで、これまで学び考えてきたことを一書に纏めることにしました。

1 東大を退任した時の最後の学期(1993)の最終講義録[13回]は『日本の教育』(1994)として東大出版から出していただきましたが、本書では現代教育を考える前提としての、地球時代としての現代認識と、平和への思想に関しての講演や論文をまとめたものです。いずれも東大時代の後のものです。

私の博論のタイトルは『現代教育の思想と構造』で、1962年提出、1971年に同名で岩波書店から出版されましたが、そこでの「現代教育」とは近代を古典近代と近代後期に分けての近代二分論に立ち、そこでの現代は古典近代(近代前期)とは区別された近代後期、1870年代以降をさすものでした。同時に戦後日本の教育をどう捉えるかという問題意識からの、日本の近代(明治以降)と戦後改革(現代日本)の歴史的意義を捉えるための参照軸として近代・現代のヨーロッパ思想史を概括したものでした。

従って時期区分的にはやや曖昧さが有り、それを自己批判的に整理し、ドクター論文の「現代」は近代後期[帝国主義、ファシズムを含む]とし、第二次大戦以降(1945)を現代とし、8・15を、「地球時代」への入り口としての「現代」の始まりとして捉えてきました。この時期区分と名称変更については、さきの最終講義の冒頭でも詳しく話した所で

2 本書は地球時代とはなにか、いつからか、そこでの主要な課題はなにかを考えてきた作品です。そしてとりわけ戦争と平和の問題を軸に、国連憲章

と日本国憲法が象徴する、戦後の世界と日本の改革の理念と現実の問題、それに私自身の自分史を重ねて考えてきたものです。1933年生まれの私は、日中戦争で父が戦死、「誉の家」の軍国少年として育ち、中一で敗戦、その後の青年期から現在まで、法学部と教育学大学院で学び、政治・教育思想史と人間学としての教育学研究を続け、発達教育学と人権としての教育の思想を深め、その仕事と平行しつつ、日本と世界の平和運動に学び、連帯しながら、憲法9条の理念で地球平和憲章を創る活動に取り組んで来ました。平和を戦争のない世界だけでなく、核抑止力、軍事力に頼ることの愚かさや危険性、さらにいっさいの暴力を無くし、持続可能な地球環境のもとで、全ての人が尊厳をもって平和に生きる権利の思想を探る活動です。その思考の跡を辿り、現在の思いを綴ったのが本書です。

第一部は地球時代とその課題を問う論稿、第二部は地球平和憲章への取り組み、第三部は平和への思想として、さまざまな視点からのエッセイ風のもの。憲法9条と幣原喜重郎、丸山真男の平和思想、アインシュタインとフロイト、沖縄と福島にどう向き合うか、安保法制違憲訴訟の原告としての陳述(地裁・高裁)も入れました。最後は地球憲章に取り組む者にとってのウクライナ戦争の問題、そこからの教訓だとする日本政府の日米安全保障強化による国防論と大軍拡についての批判をメモしたものです。

幻想をもたず 希望をつむぐ!をモットーに、今こそ9条と地球平和憲章の出番ではないかという思いでまとめました。

3 ここに収めた一つ一つの講演、論考を読み直し、纏める作業は自分の生活・活動と思考のあとを辿る作業であり、自己確認と再認識の作業でもありました。学び直す(unlearnを含む)とはこれまでの知識を繋ぎ直し、再構造化し、あたらしい意味の発見と意味付けの作業のことだと再確認し続ける過

程でもありました。

知ってるようで知らなかったこと、分らなかったこと、誤解していたこと、が繋がり、なかで分ったこと、それは歴史研究、思想史研究の面白さを再発見する過程でもありました。

例えば平和の思想史のなかで、サン・ピエールとルソーとカントはどう繋がり、どう違うのか、あのビクトル・ユーズが子どもの権利と平和の思想家だったこと、これを知ればレ・ミゼラブルの読み方も深まること、民主主義についても、第一次大戦に民主主義を守るために参戦を主張したJ・デューイは戦後、戦争認識を変え、戦争違法化運動(outlawry of war)に積極的に参加し、＜民主主義と平和＞の思想家に転生したこと。アインシュタインとフロイトという二人の「平和主義者」(自称)の往復文章にみる人間観、暴力観と平和への思いの深さ。平和のための抑止力に賭けて核開発を進言したアインシュタインの、広島原爆を知って受けたショック。ラッセル・アインシュタイン宣言とバグダダ会議に繋がる科学者たちの核兵器への反対と非戦・平和への願い。国連憲章、日本国憲法、UNESCO憲章はこの戦争観の大転換のなかでの位置づけられるのです。

4 第一次さらに第二次世界大戦を経て、戦争認識が変わったのです。「平和を求めるならば戦争に備えよ」は「平和を求めるならば平和に備えよ」に変わったのです。私たち戦後第一世代は、憲法を学び、国連憲章を学び、これからは"Si vis pacem para bellum"ではなく"Si vis pacem para pacem"なのだと、ラテン語表現とともに戦争観の転換を学んだのです。私もそのことをラテン語とともに覚えているのです。最近話題になっている加藤周一の同旨の発言も、戦後の同時代人として、このラテン語をも共有していたのだと思います。

5 また日本の平和思想史の読み直し。田中正造は公害反対だけでなく、戦争反対論者だったこと、岡倉天心の「文明」批判、柳宗悦の朝鮮認識、幣原喜重郎の9条発意、丸山真男の9条再認識、これらは私の「戦争と平和」認識の過程での出会いであり、再発見の驚きと喜びでもありました。また、福島の声は広島に通じ、沖縄の声は私たちの胸に響くものです。

子どもの権利条約のいう子どもの権利は平和を前提とするものです。学校は体罰やイジメの温床ではなく、平和の文化が熟成される温床でなければなりません。本の表題を「平和の思想」ではなく「平和への思想」としたのはそのような思いからでした。第一次大戦で息子を亡くし、第二次大戦で孫を亡くしたケーテ・コルビッツが残したことば「平和主義を単なる反戦と考えてはなりません。それは一つの新しい思想、人類を同胞としてみる理想なのです」を心に刻む作業でもありました。

6 さらに、現代を地球時代の入り口と捉え、その出発を1945年にもとめたのは歴史(学)の時代区分への問題提起でもあります、それは「地球と人類」の再発見 [上原専祿] の始まりであり、戦争認識の変化と非暴力・平和の思想、植民地からの解放と独立の問題(バンドン会議)であり、人間と自然の関係の捉え直しでもあります。この地球を未来世代から預かっているとするジャック・イヴ・クストーの地球認識と未来世代の権利思想からも多くを学びました。クストーの友人であり、地球倫理を考える服部英二さんにも学びました。

子どもの権利条約市民・NGOの会の代表でもある私にとって、地球環境の視点と未来世代の権利の視点は子どもの権利思想を豊かにする視点だと思っています。それは平和の思想を豊かにする視点でもあります。これらすべてが軍国少年であった私が戦後に学び、学び直してきた事柄であり、視点であり、視野 [座] (perspective) の問い直しと広がり跡なのです。

それぞれの論点に、なに?なんで?と思われるかたは、ぜひ本を読んで、理解し、批判し、交流し、深めて頂きたいと願っています。

7 いま。私たちは核の非人道性を訴える核兵器禁止条約を手にし、平和への道筋を見通すことができます。

思い起こせば、設立したばかりの国連総会での決議第一号(1946.124)は核兵器の全面禁止を求めるものでした。唯一の被爆国日本が声を上げるべきは当然です。それをしない政治家は戦後の誓いを裏切る者ですが、それだけでなく核を使ったアメリカの核の傘のもとでの日本の安全保障を基本路線にすることは、被爆国の国民感情と矛盾し、敗者の従属意

識を増幅させるものです。それは核兵器の非人道性を訴え続けてきた被爆者の声に背を向けるものであり、アメリカが核爆弾を使ったのは終戦を早めるために必要だったという認識を追認することにもなります。日本が被爆国として核の残虐性と非人道性を世界に訴えることに躊躇ってはいけません。訴え続けることこそが、日本人の人類にたいする責任を果たすことになるのだと思うのです。核兵器禁止条約の推進役こそが期待されているのです。そしてアジアにはASEANを軸に非核地帯宣言条約も成立しているのです。それを更に東アジア全体に広げることこそが課題なのです。日本の役割は大きいのです。

なお、今年の核禁条約発効1年の記念日（1月22日）を前に、アメリカ市民がアメリカは唯一の核爆弾を使った国としての道義的責任ある国として、核禁条約に、批准の前にまずは署名しろと声をあげていることは嬉しいニュースでした。私たち平和を望む市民は核を介して、アメリカの平和を求める市民と共苦し共感し、連帯することができる、しなければならないのです。そこにも希望があるのです。ロシアの平和を求める人々との連帯も課題であることを忘れずに。（2023.3.17）

尚、4月30日に卒寿と新著の出版を祝う会が、9条地球憲章の会と民主教育研究所の共同主催で開催されました。唯々感謝です。当日のわたしの講演レジメを載せておきます。

9条地球憲章の会・民主教育研究所共催

「地球時代と平和への思想」卒寿・出版記念講演
レジメ 2023年4月30日 堀尾輝久

はじめに うるわしき5月

ハイネとシューマン、シラーとベートーヴェン
cf. トム・ペインとコンドルセ、ルソーとマルクス：
18世紀と地球時代 人権・自由・平和 人間と自然
人類と地球

I 90年を振り返る 自分史を日本史と世界史に重ねて

1. 1933年1月5日福岡県小倉生まれ 日中戦争 父戦死 靖国 軍国少年

2. 1945年8月15日 敗戦 中1 戦後改革の中で 模索の青年期

3. 大学時代（1951-1955）

駒場寮生活 馬術部 朝鮮戦争 サンフランシスコ条約 南原繁東大総長vs吉田首相 cf川上貫一国会議員除名

法学部政治学科 丸山真男ゼミ 尾高朝雄ゼミ

4. 大学院時代（1955-1962）

勝田守一（哲学）、大田堯（教育学）、清水義弘（社会学）に学ぶ

知的障害を持つ青年との共同生活（住み込み家庭教師2年）

修士論文（『天皇制国家と教育』青木書店、所収）、「教育の中立性」論文『思想』（1958、1959）

東大・スタンフォード大共同研究に助手として参加（『教育理念』東大出版会、山住共著）

安保反対運動 60年安保参加 ビラ書き スタンフォード大教授と論争

富士見療養所で1年間静養生活 樺美智子さん死去 博論準備 患者間・地域交流

5. 東大専任講師、助教授、教授（1962-1993教育養学部、教育学部）

キューバ危機1962 ケネディ暗殺1963 ベトナム戦争・トンキン湾事件1964、日韓基本条約1965 パリ学生デモ 全世界へ1968-9 日大・東大紛争 家永教科書裁判法廷証言1969 フランス留学1969-70 中曽根臨教審1983 昭和から平成へ1989

ベルリンの壁崩壊1989 ソ連邦崩壊1991 日本教育学会会長1992 民研代表就任・東大退任1993

<研究> 戦後改革 帝国憲法・教育勅語体制から日本国憲法・教育基本法 体制

教育の自由論（国家と教育、子どもの権利と教育実践の自由）

子どもの成長・発達と学びを軸に発達教育学構想

「平和と子ども」を軸とする教育研究

cf. 『現代教育の思想と構造』1971、『人間形成と教育』1991、『人権としての教育』1991、『子どもの権利とはなにか』1986、『子どもを見な

おす』1984、『教育入門』1989、『現代社会と教育』1997（以上岩波書店）、『子育て教育の基本を考える』（童心社2007）、『教育の自由と権利』（青木書店1984）

民間教育研究運動（教科研、旧・新民研）学術会議会員（3期）日本教育学会会長
教育裁判との関わり（教科書裁判、君が代裁判）
バルム・アカデミック賞（仏政府1994）

Educational Thought an Ideology in Modern Japan ed. and trans. by S. Platger, Uni.of Tokyo Press. 1988.（仏訳、中国語訳あり）

6. 中央大学時代（1994-2003）とその後（-2023）
民主教育研究所代表 国際学会 トールーズ大名誉博士（2008）第一次安倍内閣と教育基本法改正2006 第二次安倍内閣集団の自衛権閣議決定 2014 安保法制強行2015.9.19 岸田軍拡
子どもの権利条約批准（1994）と市民・NGOの会代表 9条地球憲章の会（2017）

cf.『地球時代の教養と学力』かもがわ出版2005、『地球時代と平和への思想』本の泉社2023

Thoughts, Ideologies and Structures of Modern Education -Japan and the West- Univ. of Tokyo Press 2023（予定、博論を含む）

II 憲法と安保条約 核抑止と核禁条約の矛盾 戦争ではなく平和に尽くせ！

1. 8・15革命（宮沢俊義）と日本国憲法の成立
民主主義、国民（人民）主権、平和主義；
自由民権運動、大正デモクラシー
平和主義；戦争認識の転換；Outlawry of War（戦争違法化）運動、レビンソンとJ.デユーイ、不戦条約と幣原、国連憲章、原爆、日本国憲法前文・9条、国連総会決議1号核兵器廃絶1946.1、アインシュタインとフロイト、平和の思想史（ルソー、カント、ユーゴー、ジョゼフ・内村鑑三、田中正造、岡倉天心、柳宗悦）
cf. 宮沢俊義『あたらしい憲法のはなし』朝日新聞社1947、同名の文部省著作 <平和のためには、戦争準備ではなく、平和の準備を！>（憲法、国際法、法哲学講義・ゼミ）
河上暁弘『日本国憲法9条成立の思想的淵源の研究』専修大学出版局2006

幣原喜重郎・マッカーサー会談（1946.1.24）戦争放棄・非武装の幣原発意

岸信介首相と憲法調査会 改憲論と60年安保
高柳賢三会長とマッカーサー書簡

高柳と平野三郎ノート

cf. 高柳賢三『天皇・憲法第9条』有紀書房1963

堀尾監修DVD「しではら」2020、笠原十九司『憲法9条論争』平凡社新書2023

2. 憲法裁判と教育裁判 背景に安保と改憲論
池田・ロバートソン会談1953

家永教科書裁判 杉本判決（1970）堀尾の法廷証言：『教育の自由と権利—国民の学習権と教師の責務』青木書店1984

君が代裁判（予防訴訟）難波判決（2006）堀尾意見書と法廷陳述：『教育に強制はなじまない』大月書店2006「ティンカー判決」（1969）
米国中高校生ティンカー兄妹→ブレトン・バーバー判決（2003）目良誠二郎「校門に入っても戦争に反対できる権利を守りぬく—アメリカ民主主義の底力—」『歴史地理教育』2004

安保法制違憲訴訟 東京地裁・高裁原告陳述 in 堀尾『地球時代と平和への思想』2023

3. 地球時代認識と「9条地球憲章の会」の発足・活動 2017～

「九条の会」の一翼、その発展として、先人に学び—安保法制の恐怖と怒り

「趣意書」と会の発足2017.3.15 英独仏露中韓スペイン語訳

地球平和憲章日本発モデル案2020 と解説ブックレット（花伝社）の発刊2021

国際交流 イタリア、アフリカ、コスタリカ、韓国、中国。（アラビア語訳）

米国Matthew Eddyさん（映画『コスタリカの奇跡』の監督）とコンタクト、インタビュー

4. 戦争の危機、コロナと気候変動の危機のなかで

日本政府路線 ウクライナ戦争から学び、「台湾有事は日本有事だ」とする日米同盟強化と異次元の軍拡路線 安保三文書

<平和のためには戦争に備えよ>ではなく<平和のためには平和に尽くせ> Si vis pacem para bellum. vs. Si vis pacem para pacem.

憲法前文・9条、国連憲章、ユネスコ憲章、核

cf. ケーテ・コルビッツの言葉、中村哲さんの

実践『天、共に在り』NHK出版2013、「核兵器
禁止条約」『反核法律家』別冊2023、Jana-net
日本反核NGO連絡会に学ぶ
アートの力 ピカソ、関鑑子、坂本龍一、大江
健三郎、地球平和憲章の歌（自作）

以上

— 5 —

